



個人のやる気と組織の成果を生み出す

TOPPAN MIND WELLNESS CO.,LTD



トッパンマインドウェルネス資料集-⑤

人材育成・研修に役立つ！ ～名言から学ぶ！ リーダーに求められる資質～

株式会社トッパンマインドウェルネス

目次

1. ホセ・ムヒカ P5
本当のリーダーとは、多くの事柄を成し遂げる人ではなく、自分をはるかに超えるような人財を残す人だ
2. ガリレオ・ガリレイ P7
どうして君は他人の報告を信じるばかりで、自分の眼で観察したり見たりしなかったのか
3. デジデリウス・エラスムス P11
求められる前に忠告するな
4. マックス・ウェーバー P13
情熱なしにできることは、すべて無価値である
5. ギルバート・ケイス・チェスタートン P17
解決策がわからないのではない。問題がわかっていないのだ
6. カール・ヒルティ P21
憂い（心配）に対する最上の対策は、忍耐と勇気である

目次

7. 中根 千枝 P25

子分は親分に依存するのと同時に、親分が子分に依存することを常に望んでいる

8. プブリウス・テレンティウス・アフエル P29

私は人間である。人間に関することなら、みんな他人(ひと)ごととは思わない

9. 坂東 眞理子 P33

いい人材を育てるには、3つの「き」が必要。まず「期待する」。それから「機会を与える」。そして「鍛える」。人というのは、期待されて、機会を与えられて、鍛えられることで育っていく

10. デイル・ドーテン P37

問題というのは、自分がどんなにうまくその問題に対処できるかを示すチャンスだ

11. プブリウス・シルス P41

忠告は密かに、称賛は公に

1. ホセ・ムヒカ

ウルグアイの第40代大統領

本当のリーダーとは、多くの事柄を成し遂げる人ではなく、自分をはるかに超えるような人財を残す人だ。

【プロフィール】

ホセ・ムヒカ（ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ）

ウルグアイの第40代大統領。1935年5月20日、ウルグアイ首都モンテビデオの貧困家庭に生まれる。モンテビデオ大学卒業後、1960年代に入って極左都市ゲリラ組織ツパマロスに加入。軍事政権下でゲリラ活動に従事し、逮捕され軍事政権が終わるまで13年近く収監される。出所後に政治家となり、農牧水産相などを経て2009年11月の大統領選挙に当選し、2010年3月1日から2015年2月末まで大統領を務めた。

【解説】

ホセ・ムヒカ大統領は、大統領としての報酬の大部分を財団などに寄付し、毎月1000ドル程度で暮らしていました。その質素な暮らしぶりから「世界で最も貧しい大統領」として知られました。「貧乏な人とは、いくら所有しても満足しない人だ」という自らの考えを、普段の暮らしの中でも徹底し、多くの人たちに知らしめたのです。

ムヒカ大統領の寄付は、その多くが農業学校の設立など、ウルグアイの未来を担う子どもたちの教育や次世代の人材育成に使われました。

そんなホセ・ムヒカ大統領が日本のテレビ局のインタビューで、「この先の夢や目標」を聞かれたときに語ったのが、「本当のリーダーとは、多くの事柄を成し遂げる人ではなく、自分をはるかに超えるような人財を残す人だ」という言葉です。

この言葉には、多くの事業を成し遂げて経済的な発展を追い求めることだけが一国のリーダーの仕事ではないという彼の信念が感じられます。実際に、その信念に基づき、後世を担う人材育成に多くを費やしてきた姿に、人々は敬愛をこめて「世界で最も貧しい大統領」と称したのでしょ。

出典：日本のテレビ局のインタビューに答えての発言
(2015年の10月11日放送のフジテレビ『Mr.サンデー』拡大スペシャル)

2. ガリレオ・ガリレイ

天文学者

どうして君は他人の報告を信じるばかりで、自分の眼で観察したり見たりしなかったのか

【プロフィール】

ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei)

ユリウス暦1564年2月15日～グレゴリオ暦1642年1月8日)。イタリアの物理学者、天文学者、哲学者。1581年にピサ大学に入学するが1585年に退学。1582年頃からトスカーナ宮廷付きの数学者・オステリオ・リッチにユークリッドやアルキメデスを学び、1586年にはアルキメデスの著作に基づいて天秤を改良し最初の科学論文「小天秤」を発表した。

その後、1592年にはパドヴァ大学で教授となり、1610年まで幾何学、数学、天文学を教えた。1609年頃にはオランダの望遠鏡をもとに自分で製作し天体観測を行った。その後、木星や金星、太陽を観測し、「天動説」を唱えた。1616年に宗教裁判にかけられ、地動説を唱えないよう注意を受けたが、1632年には地動説の解説書「天文対話」を創刊。その後、2回目の宗教裁判で終身刑とされ軟禁生活を余儀なくされた。

【解説】

この言葉が収められている「天文対話」は、いわば地動説の解説書です。この書籍の中には、地動説を支持する立場の人と天動説を信じる人、中立的な「良識を有する市民」という3人が登場。4日間にわたって対話をしながら、徐々に地動説の内容を解説していくという形式で書かれています。

ガリレオは、地動説だけ紹介し、その正しさを強調するような内容ではローマ教皇庁から発行禁止とされてしまうと考え、双方の主張を取り入れながら、注意深く書き進めたとされています。

この書籍に収録された「どうして君は他人の報告を信じるばかりで、自分の眼で観察したり見たりしなかったのか」という言葉は、天動説を信じる人に向けて発せられています。地動説は、1543年にコペルニクスによって提唱されていますが、それを否定する人々の言葉のみを受け入れ、地動説そのものが何を示しているかを知ろうとしない人々に対するガリレオの苦悩が読み取れる言葉です。。

ガリレオは、当時の望遠鏡を自ら改良し、月、木星、金星、太陽の観測を続け、地動説が正しいと裏付けるだけの多くの証拠を持っていました。「自らの眼で観察する」ことで、3人が共有できる事実を集め、それらに基づいて自らの主張の正しさを立証しようとしたのです。

「天文対話」は、当時人間の理性によって天動説をかたくなに守る教会の権威に揺さぶりをかけた書籍と評されます。ガリレオの発言は、自らの「観察」により事実を集め、その事実の捉えかたを変えることで、新たな知恵を獲得できることを伝えてくれています。イノベーションが求められる世の中において、彼の言葉にヒントを得ることができるのではないのでしょうか。

出典：天文対話（著者：ガリレオ・ガリレイ）

3. デジデリウス・エラスムス

司祭・人文学者

求められる前に忠告するな

【プロフィール】

デジデリウス・エラスムス。

15～16世紀オランダの司祭・人文学者。1467～1536年。幼い頃にアウグスチノ修道会の修道院に入り、ラテン語の古典を学ぶ。25歳の頃、卓越したラテン語力が認められ、神学の博士号取得を目指してパリ大学に留学。在学中には、外国人学生の家庭教師などをして学資を稼いだ。パリ大学在学中に外国人学生と知り合いになったことを契機に、1499年にはイギリスに赴き、政治家のトマス・モアなどと親交を深めていった。1500年頃から信徒向けの信心書などキリスト教的な著作に取り組み、1506年にはイタリアのトリノ大学で神学博士号を取得している。その後、再びイギリスを訪れ、トマス・モアと交流する中で、「痴愚神礼賛」の着想を得たとされる。その後、ギリシア語やラテン語での新約聖書の出版に注力。ルターの宗教改革にも大きな影響を与えた。

【解説】

エラスムスが「痴愚神礼賛」を記したのは、1511年でルターの宗教改革の頃です。教会の頹廃など社会が大きく変革するなかで、風刺を交えて社会や教会を批判した書籍として知られています。エラスムスは、友人のトマス・モアとの交流の中で、トマス・モアのラテン名であるモルスから、痴愚の女神である「モリア」を創造し、書籍のタイトルとしたと伝えられています。

「痴愚神礼賛」は風刺書ですが、全編を通じて思想書としての示唆にも富んでいることで知られています。この書の中では、王や聖職者、学者、老人などじつにさまざまな階層の人たちが「愚者」として描かれています。「求められる前に忠告するな。」という一説は、聖職者や学者など賢者とされる人たちが、自己満足や虚栄心から他人に様々な忠告をし、それらを「自画自賛」していることを風刺したメッセージです。

この一節には、そもそも多くの人たちは他人にアドバイスすることで優越感を得ているのだという皮肉が込められているとされています。「相手のため」という助言や忠告が、じつは自分の自尊心を満足させるためのものになっていないか、アドバイスをする前に考えてみることは大切かもしれません。

出典：痴愚神礼讚（ちぐしんらいさん 著者：デジデリウス・エラスムス）

4. マックス・ウェーバー

社会学者・経済学者

情熱なしにできることは、すべて無価値である

【プロフィール】

マックス・ウェーバー (Max Weber)

1864年4月21日 - 1920年6月14日。ドイツの社会学者・経済学者である。幼い頃から読書を好み、12歳の頃にはマキャベリの「君主論」を読み、スピノザやカントの哲学書も愛読したとされる。ハイデルベルク大学とベルリン大学等で法律学や経済史などを学び、卒業後にはベルリン大学の講師となった。その後、30歳という若さでフライブルク大学の経済学教授として招聘された。1896年にはハイデルベルグ大学の教授となるも、実父との関係性に悩み、精神的な痛手から病気となり、33歳で辞職。1900年代初めによろやく病気から回復し、社会学、経済学のほか、宗教や語学など幅広く学問を再開した。1914年に第一次世界大戦が勃発すると軍役に従事。1917年頃に退役すると、再び学問・研究に没頭し、54歳で再びウィーン大学やミュンヘン大学に招聘され「職業としての学問」の講演を積極的に行った。1919年に同名の著書を出版した。

【解説】

マックス・ウェーバーの生涯は、学問・研究にささげた一生とすることができます。社会学者ですが、政治学や経済学、歴史学など社会科学全般にわたる分野での数々の業績を残しています。

1919年に出版された「職業としての学問」は、当時の大学生に向けて行った講演の内容をまとめた著作です。第一次世界大戦の敗戦が濃厚となりつつある状況の中、当時の大学生の間では、「学問が人生や世界の意味を明らかにしてくれる」という論調があったとされています。第一次世界大戦の激動のさなか、ドイツの学生たちは学問に救いをもとめ、そして教師に指導者としての役割を求めたとされています。

そうした学生たちが学問に対し抱いた期待に対してマックス・ウェーバーは、まず、「学業と政策を明確に区別すること」と説きました。そして、「学問とはあるものごとの解釈に全身全霊をかけて打ち込む」ような「仕事」であるということを強調したとされています。いわば、学生たちに向けて学問を究めることは厳しいこと、現実から逃避したいというような安易な気持ちで取り組むのでは、何物をも得られないことを語ったのです。

いわば、「学問を仕事としている私は、社会に何をもたらそうと努力しているのか」というマックス・ウェーバーの自問の答えが、「情熱なしにできることは、すべて無価値である」という一節に込められているのかもしれませんが。現代社会で働く多くの人たちにとっても、仕事の取り組み方、取り組む姿勢を見直すときに示唆に富んだ言葉といえるでしょう。

出典：職業としての学問（著者：マックス・ウェーバー）

5. ギルバート・ケイス・チェスタートン

作家・批評家・詩人

解決策がわからないのではない。問題がわかっていないのだ

【プロフィール】

ギルバート・ケイス・チェスタートン

イギリスの作家・批評家・詩人・推理小説家。1874年5月29日～1936年6月14日。ロンドン・ケンジントン生まれ。セント・ポール校に在学中に画家を志し、ロンドン大学付属のスレイド美術学校に進学するが、途中で挫折して文学の道歩んだ。なお、セント・ポール校では後に推理小説家として知られるようになるE・C・ベントリーと偶然に出会い生涯の友となる。1900年に「戯れる白髪」、「野生の騎士」の2冊の詩集で文壇デビュー。その後、1911年に「ブラウン神父の童心」を上梓。以後、「ブラウン神父の知恵」（1914年）、「ブラウン神父の不信」（1926年）、「ブラウン神父の秘密」（1927年）、「ブラウン神父の醜聞」（1935年）など、一連の「ブラウン神父シリーズ」を発表。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズと並び称されるミステリーの世界手的な傑作と評された。作家・推理作家としてだけでなく、政治・社会評論家としても活躍。イギリスの社会や政治を厳しく批評することもあった。

【解説】

ギルバート・ケイス・チェスタートンの「ブラウン神父シリーズ」は、カトリックの司祭でアマチュア探偵でもあるブラウン神父が活躍する、ミステリー作品です。ブラウン神父シリーズの第一作となる「ブラウン神父の童心」が発表され1900年代初頭は、本格的なミステリーと呼べる作品がそれほど多くはなかったとされる時代。そんな時代にあって、「普通の司祭」が緻密なトリックの謎をじっくりと解き明かしていくという展開は、読みごたえのある本格派ミステリーとして多くの読者の心をつかみました。

「解決策がわからないのではない。問題がわかっていないのだ」という一節は、ブラウン神父シリーズの中の「ブラウン神父の醜聞」（1935年）の中に記されています。建設会社の社長が殺された事件の謎解きで、犯人が殺人予告をした後に、敢えて自殺に見せかけて殺したことに疑問を抱いたブラウン神父が発した言葉です。

ブラウン神父は、どのように殺したのかという解決策を探すよりも、まずは「殺人予告」をしておきながら「自殺に見せかけた」犯人の行動に隠されたメッセージを読み解こうと推理をします。つまり、なぜ殺したのか、殺人の背景にある「問題」に焦点を当てて推理を進めたのです。

人は何か問題に直面すると、どのように解決するかを考えがちです。しかし、まずは「問題」と向き合わないと、真の解決には至らないということです。行き詰まったときこそそもそも何が「問題」なのかを探求することが、問題解決の最初の一步であるといえそうです。

出典：ブラウン神父の醜聞（著者：ギルバート・ケイス・チェスタートン）

6. カール・ヒルティ

哲学者・法学者

憂い（心配）に対する最上の対策は、忍耐と勇気である

【プロフィール】

カール・ヒルティ

19世紀スイスの哲学者・法学者。1833年2月28日～1909年10月12日。スイスのザンクト・ガルレン州のヴェルデンベルクに生まれ、1844年に州立ギムナジウムに入学し、宗教教育を受けた。古典学、英文学、仏文学も学び、1851年にはドイツのゲッティンゲン大学に入学し、法律学や哲学、歴史を専門に学んだ。その後、ハイデルベルク大学に移り、法律の研究に専念。「ドクトル」の称号を得た後に、今度はロンドンとパリで遊学した。スイスに戻り、弁護士を開業し、1873年にベルン大学正教授となりスイス国法、国法学、国際法で教鞭をとった。1909年にはハーグ国際仲裁裁判所のスイス委員にも任命されている。

【解説】

法学者でもあり哲学者でもあったカール・ヒルティは、熱心なキリスト教信者でした。聖書に書かれた「イエス・キリスト」の発言を重視し、そうした宗教観に基づき、人生や人間、神、死、愛などをテーマに多くの言葉を残しています。

「憂い（心配）に対する最上の対策は、忍耐と勇気である。」は、カール・ヒルティが仕事と習慣や、人間における幸福についての考え方を記した「幸福論」の中において語られた一節です。

カール・ヒルティは弁護士としての仕事や大学で教鞭をとる中で、多くの人々が困難や不安、心配事に直面する姿を見ていました。その中で、人々は様々な出来事に直面した際に、最初はそれが不利益なことや不都合なことに思えても、後になると「それほど大きな問題ではない」ことに気が付く人が多いことを経験から悟ったとされています。

そこで、心配事に対処するには、まずは、そのことを「忍耐と勇気を持って」しっかりと受け止めることが大切であると説いたのです。

社会人としてスタートを切る新入社員への意識調査で、不安に思うことをたずねると、「人間関係がうまく築けるか」、「仕事がきちんとできるか」、「職場に馴染めるか」などが上がります。受け入れ先の先輩や上司は、その不安を受け止めて、彼らの成長を支援する役割があるでしょう。一方で、この名言からは、心配事を払拭するには、まずは自分自身がそれらと向き合いきちんと受け止めること、そして勇気を持って「自分から一歩を踏み出す」ことも必要だということもわかります。新入社員のこれから「幸福」であるためには、先輩や上司がすべてお膳立てするのではなく、本人の「忍耐と勇気」をサポートすることも大切だといえるのではないのでしょうか。

出典：幸福論（著者：カール・ヒルティ）

7. 中根 千枝

社会人類学者

子分は親分に依存するのと同時に、親分が子分に依存することを常に望んでいる

【プロフィール】

中根 千枝（なかね・ちえ）

1926年（大正15年）11月30日に生まれ。社会人類学者。現在の東京都新宿区に生まれ、小学校高学年から約6年間を北京で暮らした。帰国後に東京都立第八高等女学校（現・東京都立八潮高等学校）に入学し、当時の津田塾専門学校外国語科を卒業後に、東京大学文学部東洋史学科、同大学院を修了。その後、東北から鹿児島までの農村の調査をしたほか、インド、イタリア、イギリスに留学し、人類学の研究を世界各地で行った。1970年に東京大学東洋文化研究所教授に就任し、その後、国立民族学博物館教授、東大東洋文化研究所所長を歴任し、1987年に東大を定年退官。1990年に紫綬褒章受章、2001年には女性初の文化勲章を受章。2014年には津田梅子賞も受賞。

【解説】

中根 千絵が著書「タテ社会の人間関係」の原型となるアイデアを思い付いたのは、インド、イギリス、イタリアなど海外での研究生活を終えて、日本に帰国したときだったとされています。日本の大学関係者との会議への参加を通じて、以前に全国の農村や漁村のフィールドワークの過程で印象に残った「寄り合い」の文化を感じとったことがきっかけとなったとされています。

そこに日本独特の「タテ社会」を垣間見たことから、その視点を日本の社会構造にまで広げ、雑誌「中央公論」に「日本の社会構造の発見」という論文を発表。その論文をもとに「タテ社会の人間関係」を上梓しました。

日本の社会では、例えば企業や学校、サークルといった集まりなど、様々な組織において、程度の差こそあれ上下の関係があり、「ウチ（内）とソト（外）」という感覚もあります。多くの人たちが感じているそれらの感覚は、日本的なタテ社会の特徴ともいえるでしょう。

そのような日本的な組織におけるリーダーの心構えとして、「タテ社会の人間関係」の中で記された一節が「子分は親分に依存すると同時に、親分が子分に依存することを常に望んでいる。」です。中根は同書の中で、「親分は、むしろ天才でないほうがよい」、「仕事ができすぎるということは、下の者、子分にとって彼らの存在理由を減少させることにもなる」というような趣旨を記してもいます。

できる上司であればあるほど、仕事を「部下に任せる」ことが苦手なこともあるでしょう。そのような場合、上司は自分の考えを理解させようとするを一度手放し、部下に対して心を開き、頼りにしていることを示すこともできるはずです。そうすれば、部下はその信頼に応えたいと動きだすので、両者の信頼関係を強めることができますでしょう。

出典：タテ社会の人間関係（著者：中根 千枝）

8. プブリウス・テレンティウス・アフエル

劇作家

私は人間である。人間に関することなら、みんな他人(ひと)ごととは思わない

【プロフィール】

プブリウス・テレンティウス・アフエル (Publius Terentius Afer)

紀元前195年もしくは紀元前185年～紀元前159年。共和政ローマ時代の劇作家である。テレンティウスが生まれたのは現在のチェニジア共和国にあった都市国家・カルタゴという説がある。奴隷としてギリシア、イタリアに連れて来られたとされている。奴隷という身分にありながら、テレンティウス家の主人から寵愛され、戯曲の作成において才覚を発揮し解放奴隷となった。25歳までに「兄弟 (en:Adelphoe) 」、「アンドロス島の女 (en:Andria) 」、「宦官 (en:Eunuchus) 」、「自虐者 (en:Heauton Timorumenos) 」、「義母 (Hecyra) 」、「ポルミオ (Phormio) 」の6つの戯曲を書いた。紀元前159年にギリシアに遊学し、その地で没したとされている。

【解説】

プブリウス・テレンティウス・アフエルの喜劇が最初に上演されたのは紀元前170年から紀元前160年頃とされています。テレンティウスは人道主義的な戯曲を作ることを好み、その創作の技法の根源には、「人間をつぶさに観察する」すぐれた洞察力があったといえます。

テレンティウスの戯曲「自虐者」の中に記された「私は人間である。人間に関することなら、みんな他人(ひと)ごととは思わない。」という一節は、自らの戯曲を創作する姿勢を示した言葉とされています。当時、同じく喜劇の戯曲で人気を博したプラウトゥスが、たとえ野卑になっても「笑い」を得ることを追求したのに対し、テレンティウスは冷静に人道主義者としての視線を崩さずに戯曲を作ったとされています。

この名言からは、奴隷という身分にあっても、他人事ではなく、同じ人間として理解しようとするテレンティウスの信念が伺えます。人そのものに関心を持つことで、その人が持つ面白さを見出し、当時の支配者からも受け入れられる喜劇戯曲を作り上げることができたのでしょう。

ここ数年、多くの企業がダイバーシティー活用というテーマに取り組んでいます。日経連は、「異なる属性（性別、年齢、国籍など）や従来から企業内や日本社会において主流をなしてきたものと異なる発想や価値を認め、それらを活かすこと」と定義していますが、ダイバーシティー活用の成果を実感できる取り組みはまだ少ないようです。テレンティウスのように、対象者を同じ働く人として観察しその特徴を活かす、という姿勢はヒントになるかもしれません。

出典：自虐者（戯曲。著者：プブリウス・テレンティウス・アフエル）

9. 坂東 真理子

大学理事長

いい人材を育てるには、3つの「き」が必要。まず「期待する」。それから「機会を与える」。そして「鍛える」。人というのは、期待されて、機会を与えられて、鍛えられることで育っていく

【プロフィール】

坂東 眞理子（ばんどう・まりこ）

1946年8月17日～。富山県生まれ。東京大学文学部心理学科入学。卒業後の1969年に総理府（現在の内閣府）入省。「総理府婦人問題担当室」（現在の内閣府男女共同参画局の前身）にあたる）の発足時より担当官として参加。1978年に日本初の「婦人白書」の執筆を担当した。その後、ハーバード大学留学などを経て、統計局消費統計課長、埼玉県副知事、在豪州ブリスベン総領事、総理府男女共同参画室長、内閣府初代男女共同参画局長を務め退官。昭和女子大学教授、副学長などを経て2007年に同大学学長、2016年より同大学理事長に就任。

【解説】

坂東 眞理子は、総理府・内閣府の官僚時代から、日本初の「婦人白書」の執筆をはじめ、男女共同参画社会の実現のために尽力しました。2006年には、女性の仕事や日常の振る舞いなどをテーマとしたエッセイ「女性の品格」（PHP新書）を上梓。累計300万部を超えるベストセラーとなっています。

また、女性が社会に進出し、男性と同じように働き、社会参画する時代が進展するにつれ、「女性の人材育成」にも力を注ぎました。「いい人材を育てるには、3つの『き』が必要。まず『期待する』。それから『機会を与える』。そして『鍛える』。人というのは、期待されて、機会を与えられて、鍛えられることで育っていく」という一節は、雑誌のインタビューの中で、「女性を育てることの必要性」について触れた中で語られた言葉です。

インタビューの中で、坂東は日本には長期雇用を前提に、「会社で人材を育てる文化がある」ことを述べています。しかし、ライフイベントなどにより途中でキャリアが中断される女性に対しては、「育ててもその投資が回収できない」という暗黙の認識から、「期待」せず、「機会」も積極的には与えず、結果「鍛える」こともできていないと指摘。本来、3つの「き」は人材育成の基本であり、男女の区別はないのですが、とりわけ女性には3つの「き」が適応されていない現状があると説明しています。

日本の労働力人口減の流れの中で、企業が優秀な人財を確保するためには、女性の採用・育成・活用は重要なテーマです。女性のライフイベントを言い訳にするのではなく、人財活用という大きな目的から、女性にも3つの「き」を適応することに、向き合う必要があるかもしれません。

出典：雑誌「衆知」（2016年7・8月号、特集「世界で戦える人材の育て方」）

10. デイル・ドーテン

実業家、コラムニスト

問題というのは、自分がどんなにうまくその問題に対処できるかを示すチャンスだ

【プロフィール】

デイル・ドーテン

1950年生まれ。実業家、コラムニスト。自己啓発書作家という肩書も持つ。アリゾナ州立大学大学院、スタンフォード大学大学院で経済を学ぶ。1980年にマーケティングリサーチ専門会社のリサーチリソース社を設立。その後、マクドナルド、3M、P&G、コダックなど大手企業を顧客とする、米国有数のマーケティングリサーチ会社へと成長させた。1991年に新聞に執筆したコラムが好評だったことから執筆活動を開始。著書に「仕事は楽しいかね？」などがある。

【解説】

デイル・ドーテンの著書「仕事は楽しいかね？」は、出張の帰りに大雪のために空港で足止めされた35歳の「私」と、ロビーで偶然に出会った「老人」との対話で構成されています。「老人」はじつは名だたる企業のトップがアドバイスを求めるほど有名な実業家という設定で、その老人に「私」は仕事で鬱積した悩みを打ち明けながら、自分のこれからの人生へのヒントを得ていく物語です。

「問題というのは、自分がどんなにうまくその問題に対処できるかを示すチャンスだ。」という一節は、老人が「私」に与えたヒントの一つです。

老人は、マジックテープが発明されたのは、発案者が植物の「オナモミ」がウールのズボンにくっついてしまう問題を解決しようとしたことがきっかけだったと説明します。オナモミの構造を細かく研究したことで、その構造をヒントにマジックテープが発明されたのです。

また、「川沿いに暮らすならワニと仲良くなれ」というインドのことわざを引き合いに、問題が起きたときにその問題を解決しようとするのではなく、その問題を良く理解し、「仲良くなる」ことで、問題が問題ではなくなることを説いています。

オナモミがくつつくのはどうしてだろう？と探求し、怖いワニは困り者だからこそ同じ川で生きる仲間として見てみたらと考えてみます。真実を見て、目的に立ち返り、柔軟な見方をすることで、よい解決策が生まれる可能性があるのです。問題を見つけたら、すぐに解決策を探すのではなく、この問題はということだろう？何で起こってるのだろう？どうなるとよいだろう？と、問題の捉え方を探求してみることで、より良い対処法が発見できるということではないでしょうか。

出典：仕事は楽しいかね？（著者：デイル・ドーテン）

11. プブリウス・シルス

喜劇作家・詩人

忠告は密かに、称賛は公に

【プロフィール】

プブリウス・シルス

紀元前1世紀頃の古代ローマの喜劇作家・詩人。生没年は紀元前46年～紀元前29年頃とされている。もともとは、シリアの奴隷であったが、その後にイタリアに連れていかれ、喜劇を中心とする戯曲の才覚を発揮したという。一説には「ものまね喜劇」を得意としていたとされる。喜劇の戯曲が認められることもない、奴隷の身分から解放され、喜劇作家となった。

【解説】

プブリウス・シルスは、「箴言集」の中で数多くの名言・格言を残しています。「忠告は密かに、称賛は公に。」もその一つ。とりわけ友人への忠告は密かに行うべきで、反対に称賛するときは大々的に行うべきであることを述べた一節とされています。

プブリウス・シルスは、奴隷という身分にありながら、喜劇の戯曲を創るという才能で、自らの人生を切り開きました。奴隷から身を起こしたプブリウス・シルスが、自分の作家としての地位を確固たるものにしていく過程で大切にしたのは周囲と良好な人間関係を構築することだったとされています。

「忠告は密かに、称賛は公に。」という一節は、友人との良好な関係を築くために、自分ができる配慮を示した言葉といえます。職場における人間関係に置きかえると、得られる示唆も多いでしょう。例えば上司と部下の関係。上司が部下に軌道修正を行うために、“忠告”をしたときは、1対1で“密かに”真剣に向き合うこと。一方で、良い成果をあげてくれて褒めるためには、利害関係者に公式にアピールできるような報償を検討する、などの重要性を学ぶことができます。

また、シルスのように身分が低くても、この名言のように相手に配慮した言動を取り続けることで良好な人間関係を築き、自分の仕事を確立していったという点も興味深いといえます。役職や権限がなくても、自分の努力で築く人間関係があれば、できる仕事は多いということかもしれません。

出典：箴言集（著者：プブリウス・シルス）



個人のやる気と組織の成果を生み出す

TOPPAN MIND WELLNESS CO.,LTD

株式会社トッパンマインドウェルネス

〒110-8560 東京都台東区台東 1 - 5 - 1

T E L . 03-3835-5340

F A X . 03-3836-8525

<http://www.mindupnavi.com/>